

関東教区「2023 年度社会活動協議会 in オキナワ」

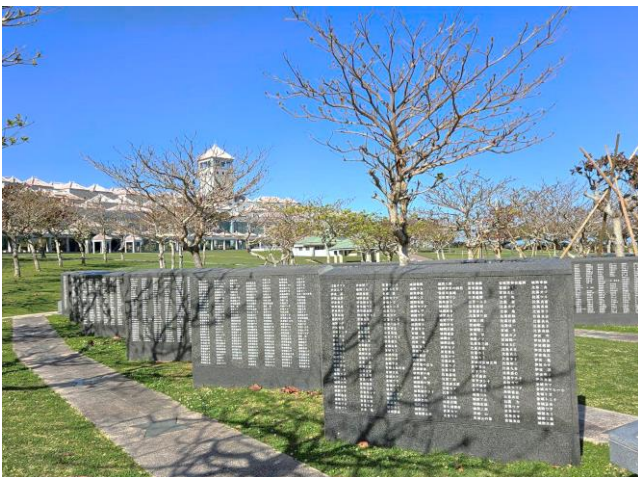
報告書

2024 年 2 月 19 日(月)～22 日(木)

2 月 19 日(月) 関東教区プログラム

南部戦跡～普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会

2 月 20 日(火)～22 日(木) 第 8 回 9 条世界宗教者会議



「2023年度社会活動協議会 in オキナワ」- 沖縄の地に立って、憲法9条を考えよう

| 関東教区「2023年度社会活動協議会 in オキナワ」プログラム | | | |
|----------------------------------|---------------------|--------------------------|-----------------|
| 関東教区プログラム | 第8回「9条世界宗教者会議」プログラム | | |
| 2月19日(月) | 2月20日(火) | 2月21日(水) | 2月22日(木) |
| | 8:15 安里教会集合 | | |
| | 8:30 出発 | | |
| | 終日、現地研修 | 9:00 全体会① | 9:00 全体会④ |
| | 終日、現地研修 | 2名の参加者より発言 | 共同声明 |
| | 昼食はバス内・弁当 | | 今後の連帯のために |
| | | 10:50 全体会② | *ユースは9:00~10:30 |
| | 読谷村 | 2名の参加者より発言 | 独自プログラム |
| | MASE-B発着基地 | | |
| | 嘉手納基地 | | 12:00 平和行進 |
| | 辺野古基地建設現場 | 12:30 昼食 | 新都心・約40分 |
| 13:00 (飛行機の到着時間 によって変更します) | 普天間基地 | ポスターセッション (テーマごとのブース) | 解散 |
| | | *ユースは独自セッション | 13:00 オプション |
| 平和祈念資料館 | | | 現地研修 |
| 平和の礎 | | | |
| その他、南部戦跡 | | | |
| | | 16:00 全体会③ | |
| | | 沖縄からのメッセージ | |
| | | ・沖縄戦体験者証言 | |
| | | ・石垣・宮古の現状から | |
| | | | |
| 18:00 普天間基地ゲート 前でゴスペルを歌う会 | | 18:00 夕食 | |
| | | 交流の時間 | |
| | 19:00 開会 | | |
| 19:30 移動 | オリエンテーション | *ユースは独自プログラム | |
| ホテルへ | 基調講演 岡本厚さん | | |
| 夕食 | | | |

「沖縄の風に触れ、地を歩いたなら」

横山由美子

沖縄を訪れると、縮図のように日本が見えます。世界が見えます。しかし、そのような沖縄にしまっている私たちがいます。

米軍基地は日本のあちこちにありますが、その面積の70%が沖縄に集中し、人口の9割以上が居住する沖縄本島では、15%の面積を占めています。私は新潟に住んでいますが、新潟には米軍基地はありません。なので、沖縄の人々の日常にある音—軍用機が飛ぶ爆音も聞いたことがありません。爆音は授業も中断し、思考も停止するほどの大きな音なのだそうです。それが一日に何度も繰り返されるわけです。

また、米軍の飛行機やヘリコプターの事故が起きています。2004年8月、沖縄国際大学の構内に、隣接する米軍普天間飛行場所属の大型輸送ヘリが墜落。2017年、宜野湾市緑ヶ丘保育園の屋根に米軍機の部品（10 cmの筒）落下し、次は小学校の運動場にヘリの窓が落ちました。本来は飛行ルート外なのです。保育園や学校の上空は飛ばないでとの母親たちの訴えは聞かれず、未だ改善されていないのです。

関東教区社会協議会の活動として、沖縄を訪れました。そして「9条世界宗教者会議」にも参加することができました。沖縄の風に触れ、沖縄の地を歩きながら、この地で平和憲法を学び、生かそうとする意味について考えさせられました。世界の現状—ウクライナとロシアの戦争、ガザにおけるジェノサイド、ミャンマーの国軍クーデターなどを見る時に、この平和憲法の非暴力で応えていく姿勢は、すべての宗教に共通する平和への道りであることを会議の中で確認し合うことができました。一人ひとりのいのちを大切にと祈りを合わせ、行進もしました。

残念なことに、そして申し訳ないことに、沖縄に来ると戦争が近く感じます。県民がNOを言っても、辺野古の埋め立ては強制執行され、遺骨の混じった土を海に捨てられようとしています。世界で一番危険な基地と言われる普天間基地は、市街地の真ん中に滑走路があります。それを辺野古に移設するとの理由ですが、軟弱地盤の辺野古の状態は建設を難しくさせ完成するのは2037年以降になるとの予測です。辺野古の美ら海は戻ることはないでしょう。今の政権がアメリカの言いなりになっているのは、日米安保条約の目的達成のため米軍が日本で円滑に行動できるよう取り決めた地位協定に基づいているのです。私たちにはできることがあるのではないのでしょうか。

沖縄が返還されて52年になります。当時、沖縄の人々は、やっと日本の平和憲法を享受できるのだと喜びましたが、そうはなりません。先の戦争で唯一の地上戦となった沖縄は、捨て石とさせられました。学んだことは、兵隊は国民を守らないということでした。

そして今、自衛隊のミサイル基地や米軍のヘリパッド建設が進んでいます。何のための準備でしょう。戦争の準備ではなく、平和のための行動を進めたいと切に願います。

沖縄の風に触れ、地を歩いたなら、私たちは戦争の愚かさを伝え、二度と繰り返さない覚悟を持ち、平和をつくり出すひとりになりましょう。

「憲法 9 条とアジアの平和～沖縄からの祈り」に参加して

稲益久仁子

2月19日から21日まで第8回9条世界宗教者会議2024に参加しました。NCC主催のエキュメニカルな会でした。この会議は22日までの日程でしたが、私自身の都合で一日早く関東に戻りました。プログラム一日目は大型バスに乗って辺野古（キャンプシュワブ・ゲート前）、嘉手納基地がよく見える道の駅かでな、チビチリガマ、恨（ハン）の碑などを見学した後、会場のカトリック安里教会に戻り、基調講演を聞きました。

基調講演は「沖縄から学ぶ一戦争の時代の中の『命こそ宝』一」と題して岡本厚氏（岩波書店「世界」元編集長）の講演を聴きました。命こそ宝、平和こそ正義と語ったのです。非暴力に徹し対話をもって戦争を防ぎ、戦争を留めさせると語ったのです。戦わない戦いを学ばないとした憲法9条の言葉が、とてつもない響きを持つものとして深く心に残りました。敵が攻めてきても戦わない。非戦こそが戦争を終わらせるのだと思いました。以前は非戦で平和が保たれるのだろうか、どこか疑っていました。しかし戦いは一度始めてしまったら止めることは難しいのです。どんなに人の命が犠牲になっても、戦いは簡単には止められないのです。今、日本は戦いの準備、戦争のできる国を目指して防衛費を拡充させ自衛隊の沖縄配備を強化しています。米軍と自衛隊の共同訓練も多くなっています。実際の沖縄でも、国道には自衛隊車両が多く行き交っていました。沖縄の自衛隊駐屯地の土地がどんどん増えているようでした。

二日目は仏教者やカトリックのシスター等の非暴力の重要性の話をお聞きました。世界の状況はロシアのウクライナ侵攻、ミャンマーの軍事政権、イスラエルのガザ地区攻撃など、私たちの住む地球には戦争のニュースが絶え間なく流れています。この沖縄での9条の学びは、沖縄を戦場にさせない！沖縄の人々の命を二度と捨て石にはしてはならないという祈りも含まれていると感じました。

9条世界宗教者会議では石垣島の自衛隊配備についての講演がありました。石垣島に生まれ育った内原英聡石垣市議のお話です。石垣駐屯地のことでした。防衛省が石垣市に陸自配備計画を打診したのが2015年11月、その後防衛省は住民に対して十分な説明も実施せず配備計画を強行してきたそうです。石垣駐屯地の土地はゴルフ場を買い取って整備されました。その土地の売買は文書開示請求しても黒塗りの文章が提示されたそうです。その黒塗り文に収入印紙が貼ってあり、その印紙から分かったことは、通常の3倍から5倍の値段で防衛省はゴルフ場の土地を買ったという事実が判明しました。住民の避難計画も非現実的で、戦時における住民保護は、防衛関係者は一切しないということでした。自衛隊には住民保護の余裕はなく、戦時には誰一人は守られないという報告でした。

平和憲法9条によってアジアの危機を回避しなくてはならないこと、過去の沖縄戦のように人の命が守られない事が二度とあってはならないと改めて思いました。平和のために皆で何ができるのかを考え行動しなくてはならないのです。何よりも非戦、非暴力にこそ平和への道筋があるのではないのでしょうか。平和への思いを新たにしたい沖縄研修でした。

「2023 年度社会活動協議会 in オキナワ」に参加して

ジョナサン・マッカーリー

私の妻は沖縄出身で、沖縄の歴史や現状、平和について親戚から学ぶ機会は何度も恵まれてきました。今回は日本基督教団関東教区から来て、クリスチャンの視点から沖縄を体験し、沖縄出身者や沖縄の平和のために生涯を捧げている人々の言葉に耳を傾けながら、客観的な視点から沖縄について考える機会を得られました。

クリスチャンであろうとなかろうと、沖縄の人々にとっての命の大切さを改めて感じました。初日の岡本さんは「ぬち・どう・たから」という言葉を語り、沖縄の人たちが戦時中にこの言葉を共有し、今もその言葉や人生哲学を大切にしていることを聞きました。また岡本さんは私たちに、正義について、そして命が失われるのであれば正義に意味があるのかについて深く考えさせられました。

この言葉を聞いて、大阪で出会った別の沖縄の人の言葉を思い出しました。金城さんは、大阪に住む沖縄の人たちの苦境と、それが長年にわたってどのように変化してきたかについての話してくださいました。特に 彼が、「正義が暴力的になることもある」と言った言葉を覚えています。彼は、若い世代が上の世代の決断を理解できないことがあること、特に上の世代の方が自分の名前を日本人が受け入れやすいように変え、日本社会に溶け込もうとして自分たちのアイデンティティから離れたことで、裏切られたと感じていることについても語りました。彼は、正義は時に暴力的になることがあり、私たちは他者、特に上の世代の方と関わる時に、そのことを忘れてはならないと言ったことが頭から離れません。

この話を聞いて、私はアメリカで起きている「ウォーク」という言葉の意味をめぐる会話を思い出しました。米国内のアフリカ系アメリカ人のマイノリティ文化に由来するこの言葉は、不正義に気づき、それに立ち向かう方法を学ぶためのものであるはずなのに、今は文化的な流行語となり、時には暴力的な使われ方をしています。

何よりも、ここでの生活は私に命の大切さを教えてくれました。クリスチャンとして私たちは、キリストからの罪の赦しの贈り物を受け入れることでキリストが永遠の命を与えてくださることを信じ、今ここで豊かな人生を生き、それをできるだけ多くの人々と分かち合うよう求められています。命は宝であり、命なくして他のどんなものも意味をなさないということを思い出すと、クリスチャンとして、また平和を作る者として、私たちに求められていることは、あらゆる面で命の大切さを世界に思い起こさせ、キリストからの命の約束を、私たちとキリストの呼びかけを共有しようとするすべての人々と分かち合うことなのだときわめて思い知らされました。この機会を提供してくださった関東教区に心から感謝します。

里美・マッカーリー

今回この集いに参加する機会が与えられたことは本当に感謝でした。私自身は生まれも育ちも沖縄ですが、きっと学ぶことも多いだろうと思って参加することを決めました。小さい頃から「あんな悲惨な戦争は二度と起こしてはならない」と教えられて、私自身も強くそう信じてきました。今でもその想いは変わりません。そしてこの機会を通してその思いがさらに強められまし

た。最も心に残ったことは「チビチリガマ」での話でした。いくつものガマの中で起こった悲しい出来事は何度も聞いていましたが、「チビチリガマ」の話は初めて聞きました。読谷村波平区の住民の多くは、村内のチビチリガマとシムクガマに分かれて避難しました。この二つのガマでは、全く違うことが起きたとのことでした。チビチリガマでは住民の「集団死」がおこり、もう一方シムクガマではこのような惨事はおこりませんでした。「正義とは何か？真実とは何か？」本当に深く考えさせられます。

また、武力で問題を解決することは決してできない、という想いもさらに強められました。「剣をとるものは剣で滅びる」というイエスの言葉は真実であるとわたしは固く信じます。まずは自分自身が人を愛し、平和を作るものとして、与えられた使命を果たすものになれるように祈ります。

「2023 年度社会活動協議会 in オキナワ」に参加して

石川晴彦

社会活動協議会が隔年開催になり、今までの五地区持ち回り担当地区(5年に一度担当地区開催)が10年に1度になりました。地区開催を行わない年は、沖縄研修社会活動協議会になります。

2023年2月には、関東教区での沖縄研修社会活動協議会を開催し、首里教会の戦時中の姿、弾痕の十字架が当時の恐ろしさを感じます。この弾痕跡の十字架を現在も使用し、当時を忘れるなどのメッセージに思えます。辺野古(キャンプシュワブ)ゲート前テントでの「平和へのメッセージ」今、「沖縄で起きていること」、の聞き、ゲート前でゴスペルを歌い、平和、自然の大切を知りました。

2024年2月の社会活動協議会では、1年前の辺野古での体験を思いだしながら、普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会に参加しました。「辺野古は地盤が貧弱なところで海底は、マヨネーズ状の海底であることを知り、埋め立てができる場所ではない」、「沖縄には2000mの滑走路が那覇空港・普天間基地しかなく、辺野古には2000m滑走路は作れない状態もわかっているながらも埋め立てをしている」、などを思い起こしました。

また、二日目からは、9条世界宗教者会議に参加しての研修となりました。再び辺野古を訪れ、ゲート前集会に参加できました。

沖縄は土砂の県外からの受け入れ・出しを、行えない為、埋め立て土砂に戦争でお亡くなりになった方々のお骨が入った土山を埋め立てに使っていたと聞き、驚いています。戦死した多くのお骨を山にした聖地の土砂を埋め立てにと、信じられない行動が起きています。

宗教・教派を越え、多くの人たちによる、平和への思いに触れ、現地研修でのチビチリガマでの悲惨なことを知りました。私たちの知らない世界、沖縄での学ぶことの大切さを感じました。

「2023 年度社会活動協議会 in オキナワ」と「第 8 回 9 条世界宗教者会議」

飯塚拓也

沖縄を訪ねるのは何回目になるでしょうか。

最初は神学校最終学年での「夏期伝道実習」でした。夏の沖縄を、最初は 1 か月半の予定でしたが、結局三か月に実習を伸ばして沖縄で過ごすこととしました。夏の強い日差しと、海と空の青への感動が今も忘れられません。今から 41 年まえのことでした。

当時はゆいレールも高速道路もなく、移動手段はバスか車。沖縄本島を北上するには、国道をひたすら走ったものでした。国道沿いに延々と続く米軍基地の無機質なフェンスを思い出します。

あれから 41 年がたって、海と空の青さは変わりませんが、基地の様子も全くと言っていいほど変わらないことに胸が痛みます。米軍基地の返還が進まないからです。沖縄を訪れるたびに胸を打つ痛みです。

41 年まえよりもむしろもっとひどくなっている現状を、行くたびに知らされます。

世界一危険と言われる普天間基地を移設するという表向きの名目で、辺野古の海が破壊されています。軟弱地盤の問題でそもそも本当に基地が作れるのか、基地建設が長引く中で、アメリカの軍事計画は変わっていくのではないかと、辺野古の滑走路では大型機は発着できず代替の滑走路が必要になるはず、と問題を知れば知るほど「何のための基地建設か」と憤りにふるえます。

そして、世界一危険な普天間基地を自覚しながら、今も平気で住宅の上でオスプレイを飛行させ、ジェット機の大騒音もあわせて、沖縄の人々に基地の危険をおわせているアメリカと、それを黙認する国に怒りを覚えます。

もう一つは、南西諸島の緊張を口実とした防衛力整備の強化です。弾頭を容易に核に変えることのできるミサイルを沖縄に配備し、自衛隊の駐留数を増やしています。ミサイルがどこに向けて設置されるのかと駐留する自衛隊は何の役につくのかを考えると、むしろ日本が中国を挑発し、軍事的緊張をあおっているのではないかと思わざるを得ません。

今の日本の平和憲法において、私たちの目には触れない形で軍備化が進んでいることを、沖縄の地にたつと見えてくるのです。そして、もし憲法が改正され、平和憲法がないがしろにされるならば、その先に何が待っているのかを、沖縄で知ることができます。

平和憲法がギリギリのところまで来ていることを、沖縄で学ぶたびに思われています。

今回の社会活動協議会を、日本キリスト教協議会の「第 8 回 9 条世界宗教者会議」に合流する形で行えたことは、とても大きな意義があったと思います。岡本厚氏の基調講演と現地研修、貴重な発題に学ぶことで、平和憲法である憲法 9 条の意義を再確認し、私たちがキリスト者としてどこに向かうべきなのかを確かなものにすることができました。

ユースプログラムを通して、若い世代の方々が同じように学べたことも大きな感謝でした。参加者のこれからの歩みに、良き影響が与えられたことを確信しています。

次回の沖縄での社会活動協議会は二年後になりますが、その時には少しでも基地問題が改善されていますように。沖縄が基地の島でなく、自衛隊の島でなく、平和の島となりますように。ひたすら祈り、自分にできることを考えていきたいと思えます。

最後に、私たちを送り出してくださった関東教区に、心から感謝を申し上げます。

「第 8 回 9 条世界宗教者会議 声明文」

わたしたち宗教者は、2024 年 2 月 20 日～22 日沖縄県那覇市・安里カトリック教会を会場に「第 8 回『9 条世界宗教者会議』」を開催しました。わたしたちが宗教の違いを超えて、また国境を越えて沖縄に集まった理由は、今日の世界が武力による威嚇・攻撃によって危機的状況に陥っているからに他なりません。ミャンマー軍の民衆弾圧、ロシア・ウクライナ戦争、イスラエルによるガザ攻撃、それらのすべては武力・暴力の力で「平和」「安全」「秩序」をもたらそうと標榜していますが、実際にもたらしているのは民衆の殺戮と社会の破壊であり、人間性の崩壊と未来への遺恨でしかありません。永らくこの世界が標榜してきた「武力による抑止力」そのものが、まったくの虚構であったことを、あらゆる紛争の歴史が証明しているのです。

わたしたち宗教者は、戦争がもたらす悲劇とその負の遺産の苦悩の経験に根ざし、人命・人権の尊重を中核に据え、それゆえ「戦争の放棄」「武力の不保持」「対話・外交による紛争の解決」への決意を明確に表明した「日本国憲法 9 条」を、あまねく世界の「平和への唯一の道筋」としていよいよ強く信じるものです。

「憲法 9 条」の適用の外に置かれてきた沖縄が、永らく「安全保障」の名の下で、基地と軍隊によってもたらされるあらゆる生活破壊、性暴力、環境破壊の檻の中に押し込まれ、どこの地域よりも真っ先に攻撃の標的とされる脅威にさらされてきた事実が、逆説的に「憲法 9 条」の重要性を指し示しているのです。

わたしたちは、ここ沖縄に集まり、あらためて沖縄の歴史と差別・抑圧の実相を直視しました。沖縄は、太平洋戦争末期時に、日本本土決戦の時間稼ぎのために「捨て石」とされ、住民を巻き込んでの地上戦が行われ、日本軍による住民の虐殺、軍の命令による強制集団死が各地でおこりました。

戦後は米国の軍事占領が続き、沖縄は米国から「太平洋の要石」と呼ばれました。日本が独立を回復した 1952 年から 20 年間、沖縄は日本の独立と引き換えに米軍統治下に置かれ、そのために広大な米軍基地が置かれ続けました。この間、沖縄では戦争の放棄を謳う「憲法 9 条」を持つ日本に復帰したいという願いが大きな「祖国復帰運動」に発展していきました。1972 年の米国から日本への施政権返還は沖縄の市民が勝ち取った「本土復帰」でもありました。

しかしその「復帰」は沖縄の願いを裏切るものでした。米軍基地の即時無条件全面返還を願ったにもかかわらず、復帰後も沖縄に米軍基地が置かれる状況は変わらず、日本全体の 0.6%の沖縄に、今なお在日米軍施設の約 70%が集中しています。さらには自衛隊基地までが置かれ、近年ではそれが宮古・八重山地方にまで拡大し、島々には自衛隊のミサイル基地が建設され続けています。

政府は沖縄の基地負担軽減を口にしますが、実態は世界的に貴重な沖縄の自然を破壊し、基地や軍備の機能はますます強化されています。

かつて日本からは「捨て石」とされ、戦後は米国から太平洋の「要石」とされた沖縄は、その時々力ある者にとって利用される「石」として表現されてきました。

しかし聖書のイザヤ書 28 章 16 節にはこうあります。

「わたしは一つの石をシオンに据える。

これは試みを経た石/ 固く据えられた礎の、貴い隅の石だ。」

これこそ神の目から見た時にそれ自体が価値のある石としての沖縄です。しかも神が固く据えた礎とはまぎれもなく平和のことです。平和という礎の上に置かれた貴い隅の石です。

わたしたち「9条世界宗教者会議」参加者は、この沖縄の現状に触れました。沖縄戦の悲劇の体験から叫ばれた「命どう宝(命こそ宝)」の声や、基地強要の苦悩の中から問いかけてくる声を聴きました。何より沖縄を生きる人々の平和への祈りを全身に浴びました。「憲法9条」から最も遠く引き離されてきたがゆえに「憲法9条」の尊さを証している沖縄から、世界に向けて平和を訴えます。

- ・ 私たちは日米安全保障条約の破棄と、すべての軍事基地の撤去を求めます。
- ・ 世界の宗教者が、沖縄に負わせている諸問題に連帯して取り組むことを求めます。
- ・ 武力によらず、外交と話し合いによって平和を構築していくことを、すべての宗教者が祈りと実践を通して目指します。

2024年2月22日

第8回「9条世界宗教者会議—沖縄」参加者一同

